

朝鮮時代と日本植民時代のソウル

—景観変化を中心に—

邢 基柱

東国大学校

この論文は、韓国の「ソウル」が首都として定められた1394年以来¹、日本の植民統治時代(1910～1945)まで、都市のプランが如何に移り変わり、都市景観は何を意味するものであったかを理解するために企図されたものである。

今年は、朝鮮朝第一代の「李成桂」が今のソウルに都を定めて608年にあたる年である。恐らく、一国の首都がこれ程長く続いた例は全世界にかけて稀であろう。その以前は、今のソウルを「南京」と称した。これは高麗時代の首都であった「開京」から南の方に位置していたからである。

軍事クーデターで権力を握った「李成桂」は、1393年に国名を「高麗」から「朝鮮」にかえて、君主としての権威を高めながら、君臣が共に心機一転、新しい心構えで新しい国を建てるには、都も新しい場所に移るべきであった。高麗末には開京の風水に関して、「生氣衰盡論」が高まり民心が不安になる一方、中国で明が前朝の元の都であった「北京」を廃して「南京」に移った歴史的事例も李成桂の遷都の背景である²。

遷都以降、ソウルの歴史は大きく三つの流れに区別される。①は朝鮮朝約500年のソウル、②は日本の強制統治36年のソウル、③は終戦後57年間の独立韓国のソウルである。都市の形態とか景観とかは、一度刻印されればなかなか消滅されず、前の時代性があたかも堆積岩の地層のように並び残る。特に、同じ場所が首都として長い歴史を持つと、たとえばロンドン・パリ・ローマのように、その名残をもっとも明瞭にとどめるであろう。

名残としての景観には、必ず経済的機能や統治の便利さだけではなく、都市を造った支配者の権威、臣民の社会秩序、宇宙観などが深く刻印されている。終戦後57年間にわたるソウルの現代史を見ることによって、朝鮮封建時代と日本植民統治時代の景観形態及びその意味が読み取れる。それは何であろうか。

I 風水と都造り

朝鮮朝第一代太祖は、忠清南道の鷄龍山の南麓やソウルの延世大學校附近を都の中心または宮城の候補地として論議したが、鷄龍山は半島の南に遠く偏り、風水的にもいろいろな欠点があるという理由で³、延世大學校附近の地は漢江の舟運が恵まれているかわりに、宮城と都城

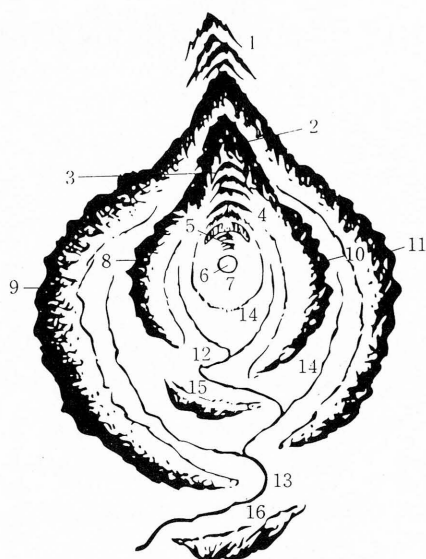
1 「ソウル」は、本来新羅で首都という意味で呼ばれた言葉である。ソウルを、朝鮮時代には「漢陽（漢城）」、日本の植民時代には「京城」、今はそのまま「ソウル」と呼んでいる。

2 朝鮮王朝実録、太祖元年8月、壬戌條

3 太祖2年12月、壬午條

の地としては狭すぎるというわけで、首都の候補地から取り除かれる⁴。つまり、新しい都は高麗の南宮として取り扱われた地が選定された。この地は、都としての十分な広さと、水運の恵みにも風水的にも適していたからである。

では、ソウルの風水はどういうものであろうか。もともと風水という言葉は「掌風得水」から由来した。すなわち、北の方に山があり風を防ぐ所、またいつも水が得られる所をいう。風水の基本的形局（モデル）は第1図のように、宮城を中心にして北の方は主山と、それに繋がる祖宗山があり、宮城の南の方には朝堂（朝廷）→ 内水口 → 案山 → 外水口 → 朝山を軸として一直線に並ぶ。墓地に関する「陰宅風水」では宮城や墓（穴）、朝堂に適する場所は「明堂（ミョンダン）」と称する。



第1図 風水のモデル

ソウルの例では、今の景福宮を中心に北の方は祖宗山として北漢山、主山として北岳山（白岳・北岳）が直線に並び、宮の南の方には内水口として清溪川（開川）、案山として南山（木覓山）、外水口として漢江、朝山として冠岳山が直線に並ぶ。つまり、宮城には神秘の生気が起こり、祖宗山（北漢山）から朝山（冠岳山）までの直線は、俗の世界から聖の世界へいたる軸を意味する。内水口（清溪川）と外水口（漢江）は互いに逆流（漢江は東から西西北方向に、清溪川は下流で西から東に）しているが、これは風水的に望ましい形局（モデル）といわれる。

主山にあたる北岳山から見渡すと、小さい山脈（spur）が左側と右側に宮城を取りかこんでいる。青龍にあたる左側の山は旧ソウル大學の後ろにある洛山であり、白虎にあたる右側の山は仁旺山である。ソウルを取りかこむ囲廓（city wall）は、ほとんどこれら青龍と白虎の山背に沿って築き上げられたものである。実にソウルの地形は、第1図のような形局をそのまま表現しているのである。

北岳山の山麓に周囲1813歩（約3198m）、高さ21尺（約6.2m）の宮城（内城）と共に首都を取りかこむ囲廓（1396年）を築きはじめる⁵。この囲廓は1422年（世宗4年）と1704年（肅宗10年）に増築・改築される。だいたいソウルの風水形局は、山の稜線に沿っているので方形ではない。都城の周りが17.6km（9975歩）、高さ12m（41尺）でほぼ楕円をなしている。南大門と景福宮の西北辺を直線で結びつけると楕円形都城の南北軸（約2680m）になり、東大門（興仁門）と西大門（敦義門）を直線で結びつけると都城の東西軸（約4020m）になる⁶。

4 太祖3年8月、己卯條

5 増補文献備考に依れば、測量尺は 6尺＝1歩、10尺＝1間、350歩＝1里である。1尺は約0.294mである。

6 孫禎睦、都市計画研究、一志社、1990、pp. 75～78、著者は1萬分の1地形図で実測している。

即ち、東西軸と南北軸の比例はだいたい9:6で、北魏の古都である洛陽を「九六城」と言うように、最も安定した黄金分割であろう。

囲廓の東には興仁門、西には敦義門、南には崇禮門、北には肅靖門の四大門を建てると共に、北東には恵化門（東小門）、北西には彰義門、南東には光熙門、南西には昭義門の小さい門を加えて都城は八つの門を持つ。山や丘が取りかこんである地形の特殊性から都城の輪廓がやや歪むわけで、これらの城門は正しい方向ではない。たとえば、都城の正南は南山が立ちふさがり、南大門（崇禮門）の方向は正南よりやや西の方にかたむく。

新都の造成工事が始まった1394年以後、約30年間にわたって⁷ソウルを取りかこむ都城のほか、いろいろな宮城を始め、左には宗廟、右には社稷壇が建てられて統治者の権威が高められると共に神々に近寄る場が造られる。宮城から今の光化門の十字路にいたる大通り、その両辺にならぶ各種の政府機関、都城内部の東西南北を結ぶ幹線道路（1427年）、鐘路一丁目から五丁目にいたる市廛行廊（1412～1414年）などは、統治の便益をあたえると共に臣民の経済生活の便も考慮された「都造り」であろう。

このスタイルが朝鮮朝の首都としてソウル（漢城）の原型である。

つまり、ソウルの都城造りは、中国の「周禮冬官考工記」を始め数多い古都のモデルを基本としながら国王の権威、韓国の風水論、地形の特殊性などが入りまじって造り上げられたものであろう。

II ソウル近代化の始まり

朝鮮王朝の首都ソウルは、1592年（宣祖25年）には日本軍、1636年（仁祖14年）には清軍の侵略によって大いに打ちくずされる。その中でも日本軍との戦争は7年も長く続いて、その被害は人的にも物的にも甚大であった。したがって大形の土木・建築工事が行なわれ、宮城・役所などが新しく造られると共に、都城を貫流する清溪川も新しく浚渫される。ソウルを囲む城以外は、北漢山にソウル防禦戦のために山城が築かれる。おおよそ1680年から1780年までの100年間に行なわれたことであるが、この頃はすでに市廛行廊を中心に商業の取引が活発だったので、今の広橋から鐘路一丁目附近まで「六矣廬」という政府向けの特権商が盛んであった。

漢江の渡し場のところどころには松波（ソンバ）・豆毛（ドウモ）・龍山（ヨンサン）・麻浦（マポ）・西江（ソカン）などソウルと地方との交通が便利な場所に商業の盛んな港町の集落が発達し、1678年（肅宗4年）ソウルの戸口はすでに2万3千戸（約16万7千人）、漢江辺の港町の集落まで合わせると、おおよそ3万戸は上回ると言われている⁸。

ソウルの近代化に積極的であったのは、1876年の開港以来、つまり高宗皇帝（1864～1907年）の「光武改革」であった⁹。開港について朝鮮の知識人の一部には、ヨーロッパの資本主義を受け入れるのに賛成する思想として「東道西器論」の影響が強かった¹⁰。

7 1394年、首都が定められた以後、1427年（世宗9年）市内の街路開設までの約30年間

8 李泰鎮、18～19世紀ソウルの近代的都市発達、The Journal of Seoul Studies, Vol. 4, 1995, The Institute of Seoul Studies, p. 4

9 高宗は1864～1896年間は「王様」、1897～1907年間は「皇帝」と呼ばれる

10 権五榮、「東道西器論の構造とその展開」、韓國史市民講座、第7輯、1990、一潮閣、pp. 76～96

東道西器論とは東洋的倫理を大切にしながら西洋の科学文明を受け入れると云う思想で、高宗皇帝は、一世紀前の名君である正祖大王（1767～1800年）が心掛けていた大事を自ら実践する意味でこの思想を積極的に受け入れたのである。

高宗は心機一転、宮城をもとの景福宮から慶雲宮に移すと同時に自らを「皇帝」と称し、国名を「朝鮮」から「大韓帝国」に改称して年号も「光武」と命名した。慶雲宮の前に広いスクエア（square）を作り、宮城を中心にして六つの方面に放射する道路を作り始める。これはパリの都市計画とか東京のそれとよく似ている。1882年、朴泳孝らの日本修信使一行がその当時東京にいた金玉均から「治道略則」という資料を貰って来たが、恐らく当時のソウル改革事業にこれが強く影響を及ぼしたのではなかろうか。

さて、英国の王立地理学会会員I. B. Bishopの著書「Korea and Her Neighbours」には高宗皇帝のソウル改造に関して、英国人 McLeavy Brownと漢城府判尹（ソウル市長）李采淵の功績が大きいと書いている。M. Brownは1892年から朝鮮政府の税務司または財務省の顧問として招待されていた人であり、李采淵は朝鮮政府最初の駐米公使（朴定陽）と共にアメリカを見聞したことのある人物だった。

ソウルの都市改造には放射状道路の構成以外に、今の光化門十字路から東大門までの鐘路と広橋から南大門までの大通りを直線に整備・拡大する。また、パゴダ公園は市民広場としての役割で、大漢門（慶雲宮の前）前面にある円丘壇は北京（ペキン）の天壇に相応する役割で計画された。そして、1898年には路面電車、1899年には最初の鉄道が露梁津から済物浦まで敷設される。Bishopは1894年の冬から1897年の春まで4回もソウルを訪ねているが、ソウルの景観が1894年当時に比べてもっともきれいに整備されていると書いている¹¹。高宗によるソウル都市改造は、日本軍国主義の侵略によって結局は失敗したが、初めての近代的「都市造り」という点で重要な歴史的意味がある。

Ⅲ 植民統治とソウルの形態

1) 韓国人人口の相対的減少

1910年韓日合邦は、ただの形式的な宣言に過ぎなかった。19世紀の末頃には、ソウルばかりでなく半島の至る所へ日本人と日本の商品があふれてきた。南山山麓の民有地を占領した日本の居留民は、1910年に約3.8万人、1920年には約6.6万人、1944年には16.0万人と増えていった。

これに反して、ソウルの韓国人人口は1910年代にその実数が減少したが、1920年代以降になると次第に増えている。このような韓国人減少現象は植民統治の厳しさを物語る。

ソウルが京城府と呼ばれて以来、終戦までソウルの人口は、1910年に29.6万人（集中率2.2%）、1920年に25.0万人（1.4%）、1930年に39.4万人（2.0%）、1940年に93.5万人（4.0%）と変化している。

ソウル行政区域の縮小（1914年）と拡大（1936年）による人口変化を別にすれば、ソウル人口の対全国比（集中率）は日本の植民統治の有様をよく反映している。すなわち、1910年

11 Bishop, I. B., Korea and Her Neighbours (韓国語訳)、1897年、pp. 497～502

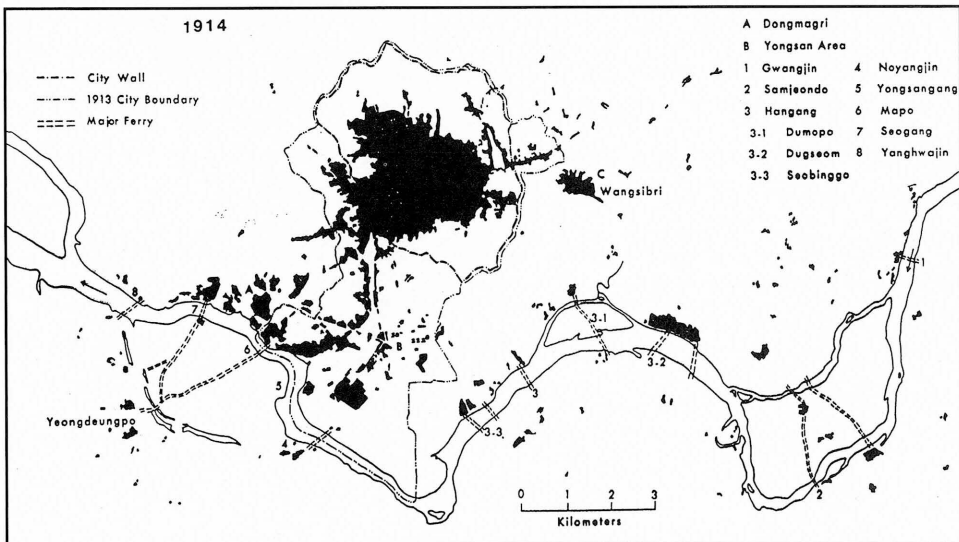
代の武断統治時代は集中率がだんだんと減っているが、1920年代のいわゆる文化統治時代と1930年代以来の戦時産業時代には集中率がだんだんと高まっているからである。

I. B. Bishop女史が1894年に推算したソウルの人口は約25万人に及ぶわけで、ソウル都城内部はおそらく人口密度が高かったと思われる。さらに、西大門と南大門の外側はもちろん、ソウルからやや遠い麻浦（マポ）・豆毛（ドウモ）・西江（ソカン）・龍山（ヨンサン）・漢芝（ハンジ）・延禧（ヨンヒ）方面一帯は19世紀末ごろからすでに郊外化現象が盛んであった。

しかし、日本の植民統治以来、ソウルにおける韓国人減少現象（実数・比率ともに）を単純に郊外化現象と結び付けるのは間違いであろう。なぜならば、ソウル近郊の人口約6.8万人は1916年から1920年までほとんど変わらないからである¹²。ソウルの行政区域は193.69km²であったが、1914年の区域改編で36.18km²、約80%以上が縮小された。従って、人口も31.7万人から24.8万人と約6.9万人が減っている。ソウル全体の人口は減るにもかかわらず日本人人口だけは反って3千人増えている。つまり、行政区域の改編で減少した人口は韓国人であり、彼等の多くはソウル郊外以外の地に移動した人口である。それに反して、日本人はほとんど都城内部に住んでいる人口であり、行政区域の縮小にもかかわらず反って増えているのである。

2) 行政区域と市街地の拡大方向

都城によって囲まれた当時のソウルの面積は16.5km²である。朝鮮朝時代500年間、一般的に言うソウルの行政区域の範囲は、城でかこまれた16.5km²と「城底十里」と呼ばれる、言わば囲廓から約4kmの範囲の領域である。この領域を古地図から読み取ると、北は北漢山、南は漢江、東は牛耳川と中浪川、西は麻浦に至る範囲で、この内では伐木・耕作・建築・埋葬など



第2図 1914年の京城市街 (K. S. Lee)

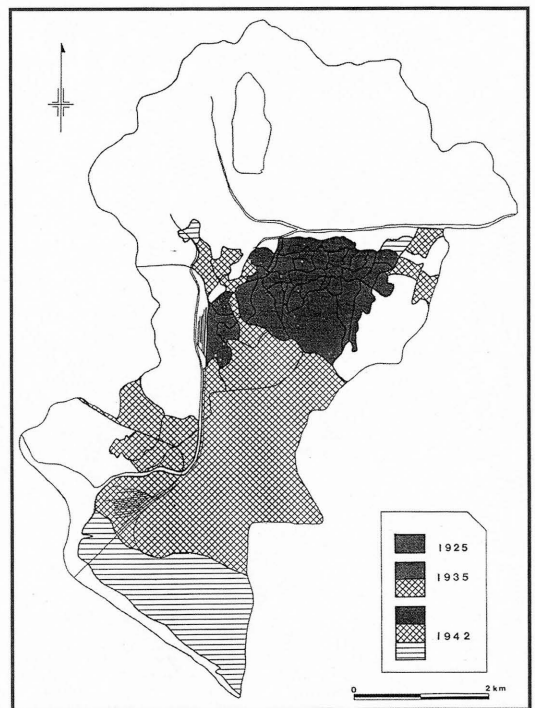
12 孫禎睦、都市化過程研究、一志社、1996、p. 54、京都市計画資料調査書（1928、pp. 7～12）からの人口表

が禁止されている。ソウル行政区域の体系は「東西南北中」の5部があり、「部」の下には現在の洞（町・村）にあたる「坊」がある。また、「坊」の下部体系として約130の「戸口」からなる「契」があるが、これが都において基本的な共同体の単位である¹³。

1914年、行政区域の改変で旧来の「五部八面」は五部と龍山だけで「京城府」と呼ばれた。即ち、「城底十里」に属する龍江（ヨンカン）・延禧（ヨンヒ）・恩平（ウンピョン）・崇仁（スンイン）・漢芝（ハンジ）方面は京畿道の高陽郡に編入される。従って、ソウルは京畿道の一部である小さいサブシステム（subsystem）として残り、面積は36.18km²に縮まった。

日本は植民地経営の便益に伴って日本人居留地を「町」、韓人居留地を「洞」と呼び¹⁴、都市計画や開発もこの便益によって施行される。京城府の面積は、1936年の行政区域改編と共に136km²の広さに拡大される。ソウルの範囲は東の中浪川、西の弘済川、南の安養川、北の北漢山とほぼ一致し、旧京城府の直轄地以外に龍山出張所と永登浦出張所の3つに分けられていた。1943年に出張所を廃してから始めて区制が採択されるが、鐘路・中区を中心に龍山・東大門・城東・西大門・永登浦の各区が生まれて、終戦後独立韓国の最初の行政区域改編（1949年）まで続く。

市街地は1914年頃既に北岳山・南山・駱山・仁旺山などの急斜面を除いて都城内は完全に建物でいっぱいになる。1920年代には鉄道の通る京城駅・龍山駅附近一帯、西大門と麻浦附近一帯、往十里附近一帯に市街地と飛地的集落が造られる。中日戦争が勃発した1937年頃には龍山区と西大門区の市街地拡大が注目されると共に、永登浦区と東大門・東小門外の新しい都市化が目立つ。日本が構想したソウルの発展軸は、植民地の中心であるソウルと日本列島との便利な結びつきを狙っていたので、市街地もソウル駅から龍山 → 露梁津 → 永登浦 → 仁川を結ぶ方向へ発達した。それが集落も工場もこの発展軸を目指していた36年間の植民時代における首都ソウルとその周辺の景観であった（第2・3図）。



第3図 京城の日本人優勢地域

13 1788年（正祖12年）にソウルは5部、47坊、338契で構成されており、およそ1894年まで同じ体系であった。「契」はむかしからの共同体をいう

14 行政区域の名称は町・洞・通・路の四つに整理され、186単位の町・洞となる

3) 市街地の民族別分化

朝鮮朝時代にもソウルに「南村」、「北村」という区分はあったが、それはソウルに住んでいる「両班」(ヤンバン)階層を両分する言葉であった。即ち、「北村」とは景福宮附近に住んでいる両班の集落を、「南村」とは今の南山北麓に住んでいる両班の集落をいう。北村には豊かで勢力のある人が多いのに対して南村には貧しい学者が多く住んでいた。

このような姿は、日本の植民時代になると全く異なった姿に変わる。即ち、北村は韓国人の市街、南村は日本人の市街となったからである。このように変化したプロセスをたどって見るに次のようである。

ソウルに日本民間人の住居集団が正式に許可されたのは1885年2月(高宗22年)以後で、いわゆる「甲申政変」が起こった次の年から始まる。彼等の安全を守るために日本公使館や領事館の周辺に集团的住居地を必要とした。従って、今のソウル中区、特に芸場洞(倭城台町)、鑄字洞(寺町)一帯、忠武路(本町)1・2・3丁目から明洞(明治町)にいたる所までが日本人の居留地として許可されたのである。初めは韓国人の強い抵抗があったが、日本の「居留民会」や「商業会」などが組織されて、明洞一帯はソウルの新しい商業の核となって鐘路の韓国人商店街と競争するようになった。

日本人の居留地はだんだん拡大され、東には忠武路5丁目・筆洞(大和町)・双林洞(並木町)まで、西には南大門路1~5丁目から南山・会賢・南倉・北倉・小公・東子洞にいたる所まで全く日本人の商店や住宅でいっぱいであった。この様子を黄玼の「梅泉野録」には‘包絡上南村 五之四十許里 盡為倭村’と表現している¹⁵。

日本人の所有土地が急に増えたのは1910年以降、ことに1912年7月から1913年4月までに行なわれた土地所有権の調査・測量の後であり、1917年版の「京城府管内地籍目録」によると、ソウル土地の約19%にあたる124万坪が日本人所有、25%の164万坪が韓国人所有、40%の257万坪が国有となっている。日本人で構成されていた会社や団体の所有分約8%を合わせると実に日本人所有の土地は韓国人所有のそれを上回っていた¹⁶。行政区域名積の80%以上を日本人が所有している町を見ると、仁峴(櫻井町)・南山(南山町)・忠武路(本町5丁目)・五壮壯洞(初音町)の4個所があり、面積の50%以上を日本人が所有している行政区域は今の中区一帯約30個所に及ぶ。

また、1912年に発表された「京城市区改修事業」は1913~1929年の17年間続くのであるが¹⁷、この名目によって29個所の道路が拡大・整備される過程で韓国人は彼等の家や土地をたくさん失った。原住民である韓国人は4大門の都城を包む京城府の領域から追い立てられた。従って清溪川北側の鐘路を除いて、川の南側を包む今の乙支路・忠武路・退溪路とソウル駅から龍山にいたる全体が日本人の住居や商店・工場に変わった。ソウルは完全に日本人のソウル、日本人の舞台に代わっていた。

15 黄玼(梅泉); 梅泉野録 卷一

16 京城府管内地籍目録; 1917年版、大林図書出版社(1982年影印本)

17 京城府; 京城府土木事業、1938, pp. 11~13

このような姿を地図によって確かめて見よう。第3図は1925年・1935年・1942年の日本人居住人口が50%を上回る町と洞だけを表わしている。

地図で確かめられるのは、ソウルを貫流している清溪川を境に北村と南村の区別であろう。1925年以来南村はだんだん南側に拡大されて、1942年にはすでに今の龍山と漢江辺までに及んでいる。ソウル駅から南に延びる鉄道の方向と一致して日本の植民的ドミナンスを延ばしていったのであろう。

日本人人口の優勢地域は、各種の土木工事によって土地割りがよく整理されているばかりでなく、衛生施設・公園・学校・病院などの都市的インフラストラクチャがよく、いろいろな大きな機関がここに立地していた。ソウルばかりでなく、韓国の数多い都市で見られる旧市街と新市街の区別は、即ち韓国人市街と日本人市街との区別から由来したと言えるのである。

また、大きな機関が立地すると、韓国人ドミナンスの鐘路すらも日本人の住宅が入りこんだ。例えば1924年の「京城大学」が開かれると、その附近の連建洞・東崇洞には教授の官舎と共に日本人の住宅地が造られる¹⁸。龍山一帯の日本人住宅は朝鮮軍司令部、第二十師団司令部、陸軍病院などの立地と深いつながりがある。

日本人優勢の「南村」と韓国人優勢の「北村」は経済力のへだたりもますます大きく広がり、朝鮮朝時代の豊かな北村と貧しい南村のなりゆきがまるっきり逆になっている。

今も北村には小市民の韓国式住宅が多く残っているのに反して、南村には小さい町工場・商店街・盛り場などが主な景観であるのは植民時代の地理的慣性であろう。

つまり、日本はソウルを北村と南村に両分すると共に、1919年から1925年まで景福宮の前面に権力の頂点である総督府を、南山には精神の頂点にあたる神宮（1916～1926年）を建てた。これは風水的には韓国民族の穴、すなわち王様の存在と、それを仰ぎ見る案山の象徴性を打ち崩すことであろう。

4) 統治手段としての都市計画

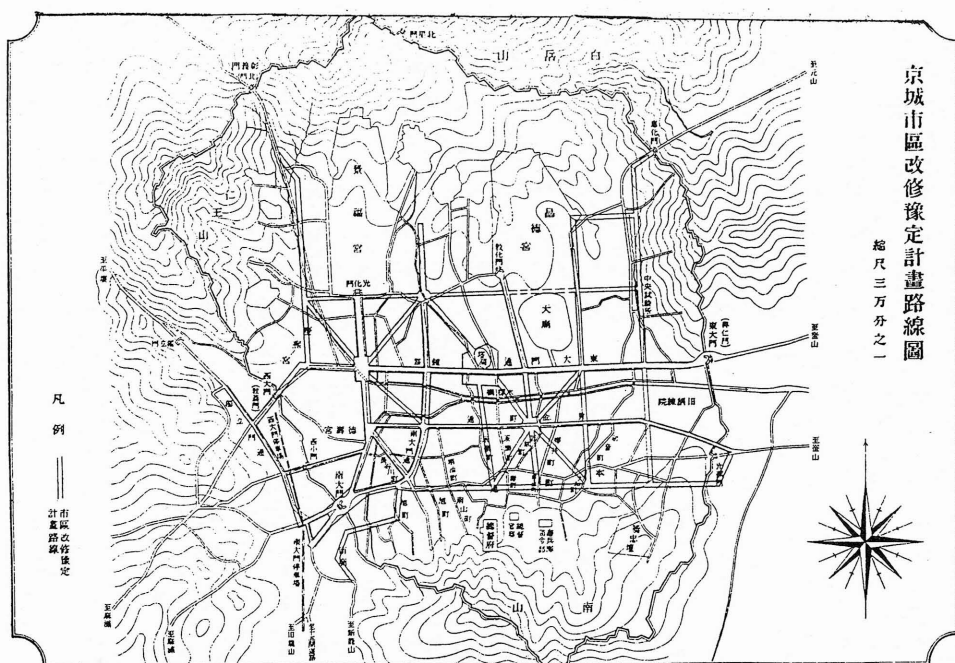
日本が近代的都市計画の技法を活用したのは、1919年4月の都市計画法発布以後であって、その以前は「東京市区改正条例」という手段が使われていた¹⁹。いわゆる「市区改正」というのは、都市の道路・橋・川を近代的に整備することによって区画（block）別に建物の近代化をはかる都市計画の初歩的手段である。

1910年、朝鮮の植民地化を達成した日本は、まず治安の安全と居留民の保護が急務であった。そこで朝鮮総督府は各地方に「市区改正」に関する訓令を発すると共に、1912年11月6日総督府告示第78号によって「京城市区改修予定路線」を発布するにいたる。初めは29個の路線であったが、その後に47個の区画路線となり、1913年から1929年まで17年間の工事が行なわれた²⁰。結局この計画の実施によって、総延長21.3kmの道路が改修されるが、だいたい朝

18 孫禎睦、日本強點期都市化過程研究、1996、一志社、p. 384

19 孫禎睦；1994. p. 101

20 京城府；京城府土木事業概要、1938、pp. 11-13



第4図 京城市区改修予定路線 (1912)

鮮朝時代から利用してきた道路の延長・直線化・幅拡・路辺の整理が主な工事であった。全体47個路線のうち25個路線の工事が行なわれるが、1934年以後は「朝鮮市街地計画令」による京城府の法律的事業となる。それ以前は総督府の訓令による事業であって、別に財政に関する事柄はない²¹。後に寄附金や夫役・国費の支援などがあったが、すでに1911年4月に発布された「土地収容令」が基礎となって植民地経営に便利な都造りは調子づいて行なわれる。

市区改修の結果に含まれている深い意味を解釈してみよう。まず、改修路線は朝鮮朝時代に使われていた既存の路線を拡張・延長・直線化しただけで、都市中心部の商店街の土地を安い費用で奪い取ることになる。工事を進めた路線は、だいたい鐘路から清溪川南側の日本人居留地を結ぶ南北路線が多く、特に日本人居留地の土地割りが中心になっている。従って、今の乙支路（黄金町）、忠武路（本町）一帯の居住環境がきれいに整備され、南北路線が結ばれるにつれて、ソウルの街路網は格子状になる（第4図）。

1912～1919年の工事から読み取れるもう一つの特徴は、朝鮮朝時代の史的遺跡や民族性の表象となっている場所の棄損である。たとえば、①敦化門から苑南洞にいたる路線によって昌徳宮と太廟（宗廟）が切り離されたり、②慶熙宮（今のソウル市立博物館）と慶雲宮の前面が道路の拡大のために切り取られたり、③南大門・西大門・東大門・光熙門の両方につながる部分の城も打ちこわされたりする。そのほか兵力移動の便とか、治安の便による工事は、①光化門と朝鮮銀行（今の韓国銀行本店）の前に広場と放射状の道路が造られたり、②光化門～南大

21 金基虎；「日帝時代初期の都市計画に対する研究」、ソウル学研究，6号，1995年，ソウル市立大学校。p. 53

門～ソウル駅を結ぶ大通り（1913～1918年）やソウル駅～東子洞（1919～1928）を結ぶ大通りなどが造られた。特に光化門から東子洞までの路線は後日、今の龍山と結ばれ龍山駐屯の兵力を移動させるのに便利な通路の役割をする。兵力の動員は、ソウル中心部において朝鮮民衆や労働者の独立運動を押える為に時たま行なわれていた。

市区改修事業の武断性は結局、在来の朝鮮人中心商店街（鐘路）から日本人中心商店街（忠武路）への商権の大移動を意味するもので、今もソウルのCBD Hard Coreは明洞（明治町）・忠武路（本町）一帯と言われる。この事業は1934年に「朝鮮市街地計画令」と言われる都市計画法律として適応されるが、1936年ソウルの行政区画が江南の永登浦まで含まれると、工場や住居地も京城 → 龍山 → 露梁津 → 永登浦 → 仁川の方向を取るようになる。この軸は、日本が中国大陆への進出にたやすく接近することの出来るルートであった。

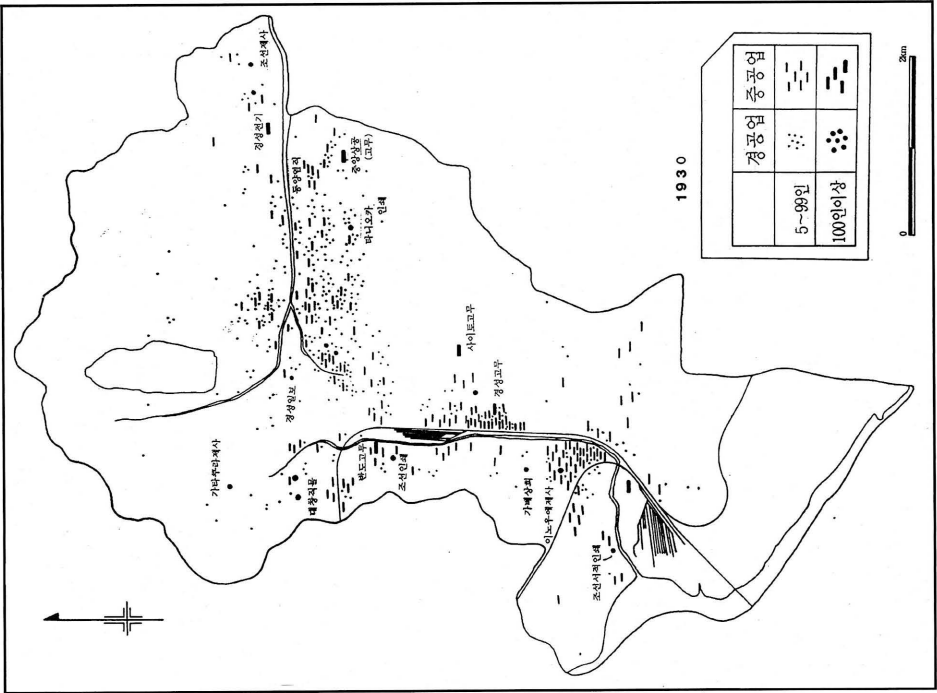
結 論

一国の首都は、政治・経済的機能ばかりでなく、皇帝の権威や思考方式、外来の文化や支配方式などの反映として造られる。ソウルは今から608年も前に首都として定められ、いき延びているが、おそらくは一つの場所が首都として、これ程長く生き延びている都市は多くない。

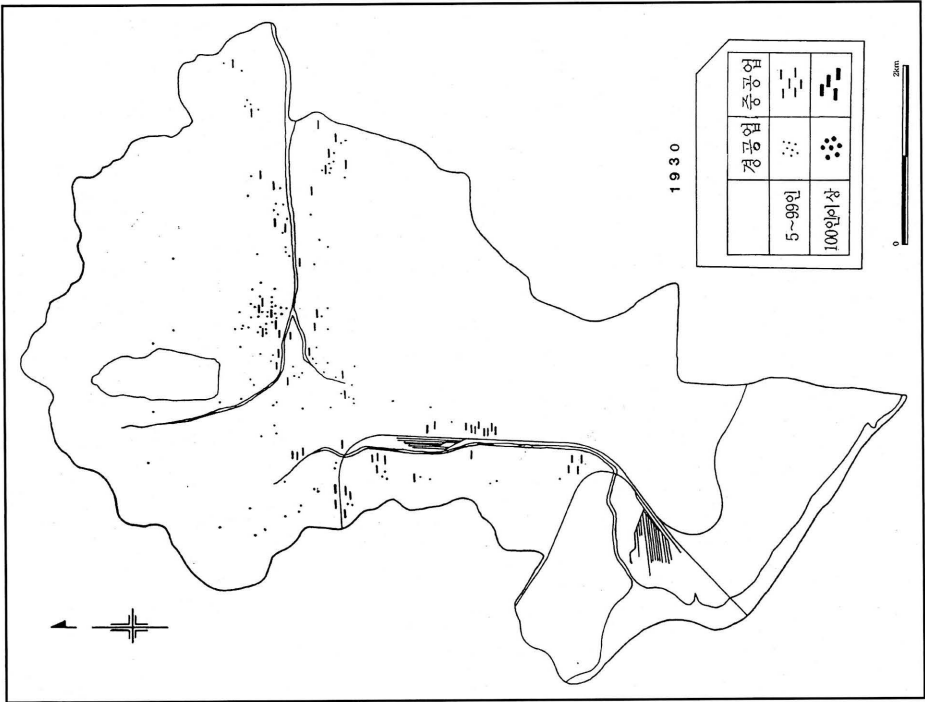
場所には場所の歴史と地理を物語る景観形態が地層のように残る。ソウルは1394年朝鮮朝の第一代「太祖」が首都として今の地を定めたのであるが、当時、中国から受け入れた風水思想とソウルの地形的特徴が首都の形態に強く影響を及ぼしている。朝鮮朝の中葉からソウル市街の道路や川や宅地などの近代的土木工事が行なわれるが、19世紀になって高宗の「光武改革」と共にソウルは近代的な「都造り」が始まる。これには当時の知識人によく言われた「東道西器論」が思想的基礎として影響を及ぼしている。

日本の武力侵略によってソウルは、植民地統治の効果を高める都市として開発される。まず日本はソウルの北側を韓国人住居地として、南側を日本人住居地として、いわゆる「北村」と「南村」を造るが、これは自然よりも人為的セグリゲイション（segregation）といえるであろう。もちろん南村にはいろいろなインフラが早く入るばかりでなく日本人経営の工場や会社が集中する。植民的「都市造り」の決定型は、1913年から1929年まで17年間行なわれた「京城市区改修事業」である。これは総延長21.3kmの道路を直線化・拡幅・延長・路辺の整理などと言うが、工事が行なわれた路線はだいたい朝鮮時代から存在していた旧路線であり、1911年に発布された「土地収用令」が基礎をなしているので、資本の投資は大したことではない。1910年代の植民的武断統治と一緒に、①韓国人を城の外に追い払う手段、②広場と放射状路線を造って民衆の独立運動を押える手段、③伝統的な文化財とか、民族的シンボルを打ちこわす手段、④日本人商店街の繁栄をはかる手段として、この事業は1929年まで行なわれたが、1934年「朝鮮市街地計画令」発布と1939年の行政区画の拡大によって、住宅と工場は大陸進出の軸、すなわち京城 → 龍山 → 露梁津 → 永登浦 → 仁川の方向へ発達する。（第5図）

以上のようなソウル物語は土地に刻印されて景観として残る。ソウルの核（穴）と知られている景福宮から南の方向約11kmの地点にある牛眠山まで直線を引き、その周辺をたどって見る。古宮から光化門十字路までは昔の「朱雀大路」で朝鮮時代の名残りが目にとまる。光化門



第5-A図 京城の工場分布 (1930)



第5-B図 京城の韓人工場分布 (1930)

十字路から南山、またソウル駅→龍山までは植民時代の足跡がたくさんある所だ。この路線には植民時代の京城日報社（今のプレスセンター）、京城府庁（ソウル市庁）があり、もっと南の方に進むと植民時代の銀座といえる中心地すなわち朝鮮銀行（韓国銀行）、三越百貨店（新世界百貨店）などがある。ここから南山の北麓（南山第1号トンネル）までは昔の倭城台があった所で、いまだに当時の日本式高級住宅がところどころに残っている。トンネルを抜け出ると、ここからは終戦後の景観に変わる。南山の南麓には終戦後に海外から帰って来た貧しい人々のバラック村、いわゆる「解放村」が目につく。ここから漢江を渡ると1970年代の開発で造られた「江南新都市」が高層アパートと共に新しい中心地となっている。この新都市から牛眠山まではいろいろな個性的な建物や人々が集まる所で、いわゆるポストモダンな気持ちが身に染みる所と言える。私はソウルの古宮から牛眠山まで11kmの直線を「ソウルの景観断面」(landscape profile)と呼ぶ。この線に沿ってソウル600年の歴史が堆積層のように並ぶからである。

【要旨】

国の首都は政治・経済的機能ばかりでなく統治者の思考、支配方式、外来文化等の反映として造られる。韓国のソウルは今から608年前（AD.1394）に朝鮮王朝の首都として定められ今まで生き延びている。

朝鮮朝第一代太祖「李成桂」が今の地を首都として定め、建設にいたるまでのもっとも強い影響は、①新しく出発する王朝の権威 ②当時に広く普及された風水思想 ③中国歴代の都城建設事例 ④ソウルの地形と生産性、である。

朝鮮朝中葉頃からソウルの道路、河川、宮城、宅地等、部分的には近代的土木工事が始まり19世紀には「高宗皇帝」が近代的都市としてソウルの改革に努力したが日本の武力侵略によって失敗する。

日本はソウルを植民統治に便利な都市として改造する。まずは、ソウルを北村と南村に区別するが、これは従来韓国人中心の商圈（鐘路）が日本人中心の商圈（本町）に変わることを意味する。このような民族的街区のセグレグレイションを促進したのが1912年朝鮮総督府告示によって発布された「京城市区改修事業」である。つまり、清溪川以南の日本人住宅地は色々の便宜施設がますます集中し三越百貨店、朝鮮銀行、第一銀行等は日本人商圈の中心として機能する。従って、日本人商圈の中心である本町の入口は広場と共に放射線道路が造られる。

「京城市区改修事業」は総督府の告示によって施行されたが、1934年の「朝鮮市街地計画令」が発布されると、地域・地区制と共に土地や建物に対する総督府の強制的裁量権はもっと拡大される。すでに日本人住宅地は清溪川以南の地を含めて、光化門十字路から本町を結ぶ路線、光化門十字路から南大門→ソウル駅→龍山を結ぶ路線に特化され、1940年に発表された「京仁地方計画」によって更に龍山→永登浦→仁川を結ぶ方向を取る。1940年の計画はソウル→仁川間の住宅地と工業地区の建設に関する計画であって結局は日本の大陸進出構想の一部といえる。

つまり、日本の大陸進出構想と植民地としてのソウル計画は終戦以後ソウルの都市形態・景観として残る。宮城の主山と言える北岳山から光化門十字路までは朝鮮時代の景観、光化門十字路から南山まで、或

いは光化門十字路口からソウル駅→龍山を結ぶ路線には植民地時代の足跡がたくさんある所だ。南山の南麓は終戦後に海外から帰って来た貧しい人々のバラック村、いわゆる「解放村」が目につく。ここから漢江を渡ると「牛眠山」までは1970年以降新しく開発された高層アパートや現代的なビルが並ぶ。すなわち、北岳山から南の牛眠山まではソウル608年の歴史を物語る「ソウルの景観断面」と言えるであろう。

【コメント】

松田 利彦

邢基柱氏の発表は、朝鮮王朝初期から日本の植民地支配の末期までという600年余りにわたる長いスパンを対象として、朝鮮建国の際における「都造り」、近代移行期における近代化の努力、日本の植民地統治の影響などについて論じたものである。コメンテーターとしては、まずそのスケールの大きさに感銘を受けたと申し上げておきたい。そして、この報告の対象とした各時代が、ソウルに地層のように都市景観を刻み込み、それが今日なお「景観断面」として観察できるという結語を興味深く聞いた。

以下、朝鮮近代史研究者の立場から、二点のみ若干の批評を試みたい。

第一点は、開港期の評価と植民地期との連続性・断絶性の問題である。報告においては、高宗期の都市計画を、「日本軍国主義の侵略によって結局は失敗したが、初めての近代的「都市造り」という点で重要な歴史的意味がある」と評価している。報告者も触れているように、高宗皇帝は「光武改革」と呼ばれる改革を推進したが、そもそも一般にこの改革は王権権力の強化を目指した多分に反動的な性格も帯びていたとされるものである。かかる光武改革の一環としての都市計画を「近代化」とのみ規定してよいのだろうか。また、同時期の都市計画がパリや東京の都市計画に類似している、あるいは植民地初期の都市整備が朝鮮王朝期の道路の延長・直線化にあった、という報告者自身の指摘を考慮するならば、開港期と植民地期には一定の連続性も存在していたのではないかという疑問が残る。

第二点は、植民地期ソウルにおける民族的な住み分けについての評価である。ソウル南部地域に日本人居住地域が広がったことは先行諸研究でも指摘されている重要な論点であるが、「ソウルは完全に日本人のソウル、日本人の舞台に代わっていた」という評価にはいささか保留が必要だろう。報告者が提示している図によっても確認できるように、鐘路以北は植民地末期においても依然として朝鮮人多住地域であった。さらに、並木真人氏が明らかにしたように、植民地期後半には、日本人多住地域にも朝鮮人の居住が拡散し、混住現象が進行した。その結果、植民地末期には、朝鮮人の居住人口が10%未満の町洞はほとんどなくなったのである。植民地支配によって朝鮮人が自らの国の首都から駆逐されつつあったという事実の重要性は全面的に認めつつも、その一方で、朝鮮民族の「したたかさ」を窺わせるような現象も視野に入れることで、ソウルの歴史的変容をより豊かに把握しうる可能性もあるのではないかという印象を抱いた。

(国際日本文化研究センター)